

原 著

一般地域住民における主観的な歯や歯肉の健康状態と全身健康状態との 関連：8020 推進財団「一般地域住民を対象とした歯・口腔の健康に 関する調査研究」より

皆川久美子¹⁾ 葭原 明弘²⁾ 佐藤美寿々¹⁾ 深井 穂博^{3,4)}
 安藤 雄一⁵⁾ 嶋崎 義浩^{4,6)} 古田美智子^{4,7)} 相田 潤^{4,8)}
 神原 正樹^{4,9)} 宮崎 秀夫^{1,4)}

概要：健康の評価方法として、歯科保健の分野においても主観的評価による健康度を評価指標にした調査が報告されている。しかし、主観的健康観についての調査対象は高齢者が多く、65歳未満の者を対象とした調査はほとんど行われていない。そのため本研究は、一般地域住民を対象に、歯や歯肉の健康状態と全身健康状態との関連を主観的健康観により明らかにすることを目的とした。

全国から20～79歳の5,000人を抽出し、質問紙による調査で回答を得た2,465人（有効回収率49.3%）の中から、分析に用いる変数に欠損値のない1,972人を分析対象者とした。対象者を年齢によって壮年（20～39歳）・中年（40～59歳）・高年（60～79歳）の3区分に分け、それぞれの群において歯や歯肉の健康状態と全身健康状態の主観的健康観の回答をそれぞれカテゴリー化した後、相互の関連を順序ロジスティック回帰分析を用いて分析した。共変量として、現在歯数、性別、仕事の有無、主観的経済状態、就学年数、治療中の疾患の有無、相談相手の有無、BMIを使用した。

その結果、すべての年齢群において歯や歯肉の健康状態が良いと回答した者は全身的な健康状態がより良好であると回答していた（調整オッズ比〔95%信頼区間〕＝壮年期12.41〔7.22-21.34〕、中年期11.77〔7.50-18.48〕、老年期10.07〔6.55-15.50〕）。一般住民において属性や関連要因を調整した分析で、いずれの年代においても主観的な歯や歯肉の健康状態と全身健康状態の間には明確な関連性が認められた。

索引用語：主観的健康観，口腔健康観，全身健康観

口腔衛生会誌 68：198-206, 2018

（受付：平成30年2月22日／受理：平成30年6月14日）

緒 言

成人において血圧値や血清コレステロール値など客観的なデータがその後の健康に影響を及ぼすことは周知の事実である。近年はこれらに加え、本人が自らのことを健康と考えているかどうか、すなわち主観的な健康観が、客観的なデータと共にその後の健康に影響を及ぼしていることを明らかにする研究が散見されるようになった¹⁾。

主観的健康観に関する研究については、社会調査の分野においては、代替指標としての妥当性の検討から始まった²⁾。これまでの報告から高齢者の生命予後に関連する指標として、年齢、主観的健康観、社会経済的地位、家庭内あるいは社会での活動能力、就労の有無などがある^{3,4)}。また、主観的健康観を規定する因子としては身体的心理的側面、日常生活動作、社会活動、収入、心血管疾患既往歴などが報告がされている⁵⁻⁷⁾。Mossey

¹⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野

²⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野

³⁾ 公益財団法人8020推進財団

⁴⁾ 公益財団法人8020推進財団調査研究事業検討会

⁵⁾ 国立保健医療科学院

⁶⁾ 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座

⁷⁾ 九州大学大学院歯学研究院口腔予防医学分野

⁸⁾ 東北大学大学院歯学研究院国際歯科保健学分野

⁹⁾ 大阪歯科大学名誉教授